

III 考 察

1 中野平の主な古墳のあり方

中野平の主な墳墳の分布を地域的に分けて概観すると、西部丘陵の南、草間、立ヶ花地籍の丘陵上に点々と所在する古墳がある。これらは、前面の延徳低湿地、小布施町の北部から千曲川の沿岸の地帯を基盤として成立した古墳と考えられ、そのうち立ヶ花1号墳（円墳、径14.5m、高さ2.6m）2号墳（円墳、径31.6m、高さ4.6m）3号墳（円墳、径20.5m、高さ3.5m）などは、前面に千曲川を望む丘陵の南面に位置し、この兩岸の地帯や千曲川にかかわる漁労や交通の権益を握る集団の権力者の墳墓とも想定されるが、その東方に谷をへだてて高所に位置する京塚古墳と西山古墳は、主墳と陪墳の関係にあるとみられるが、西山古墳を除いては、この地帯の古墳の内部主体は不明で、問題は今後に残されている。これらの古墳の編年代の位置は、西山古墳の木棺直葬の粘土床とみられ、直刀の存在からも、五世紀後半から六世紀までの築造と考えられるが⁽¹⁾、七世紀に入ると、これらの古墳の立地する背後の小丘陵に須恵器焼造窯が築造されてくる。

次の構成は、中野平の東南部の派出された尾根上に立地する古墳で、延徳地区から中野東部に至るもので、編年代の推定可能な古墳は、金鑑山（円墳、径東西17m、高さ東方より2.6m）と姥懐山古墳（円墳、径17m、高さ1.5m）である。金鑑山古墳の年代は、別項の如く六世紀第一4半期の築造とみられ⁽²⁾、姥懐山古墳の年代は、出土した振文鏡から、五世紀から五世紀前半までの築造と考えられている⁽³⁾。このほか古墳の内部主体は未調査の高遠山（全長55m、後円部高さ4.5m、前方部高さ2.8m）蟹沢、両古墳は、外形測量が行われている⁽⁴⁾。このため、この視点からの築造年代の推定は、或る程度可能である。始源期の首長の墓が前方後方墳で初まる例は、古墳文化受容地のそれぞれの地域で多くみられる現象で、この地方でも箱清水式土器文化を基盤に発展させた在地の農業共同体の小首長が、墳形を便化させた前方後方墳（前方後円墳）を築造したと考えている。この古墳文化の流入経路は、北陸方面に求める説が有力である。

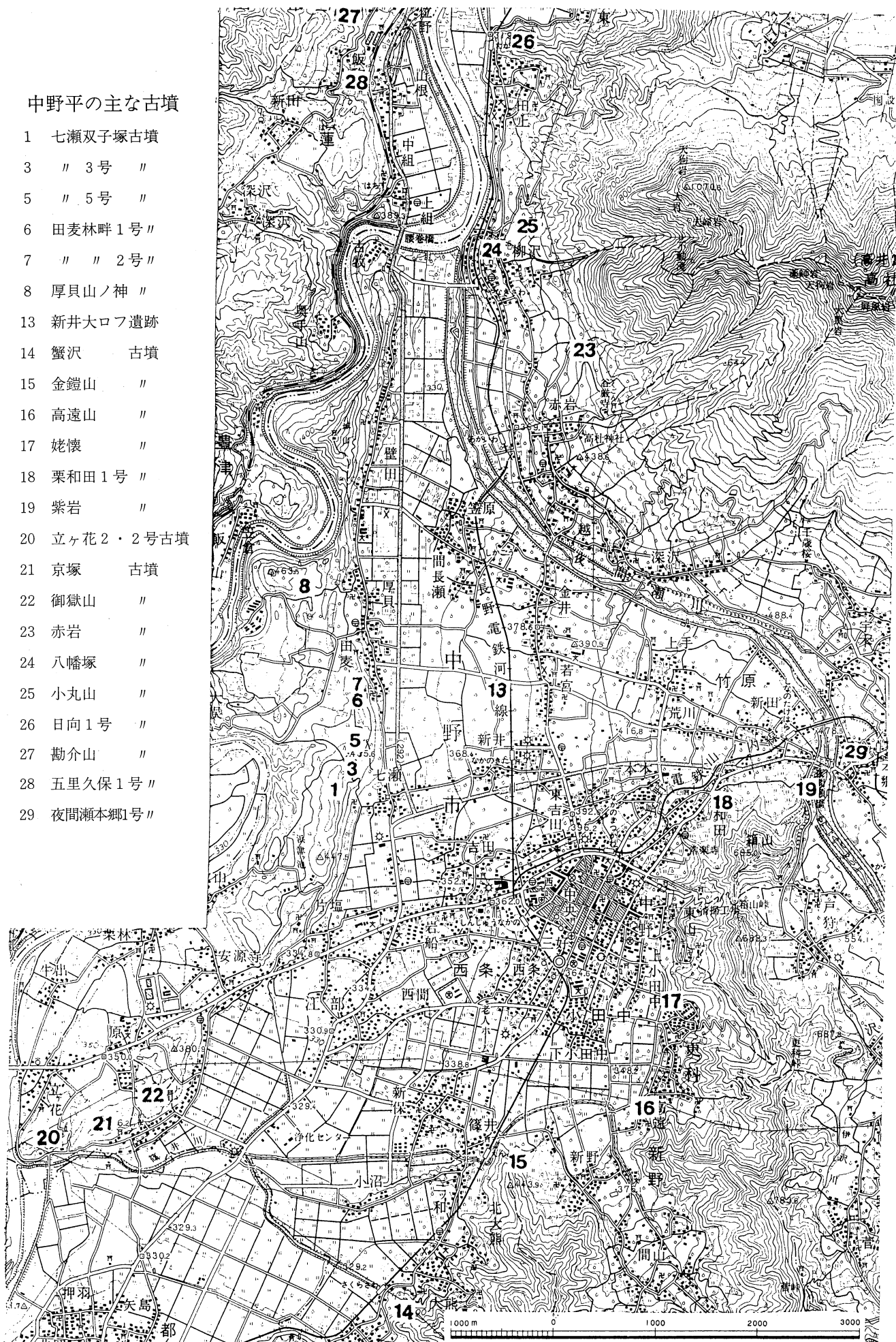
桜沢、大熊地籍間の尾根上に築かれた蟹沢古墳〔長さ48m（36m）後方部高さ5m〕は、現在、後方部の径と前方部の長さが同じか、僅か後者が長いのでは、の見解が出されており、長野市姫塚古墳、松本市弘法山古墳などの前方部の様相よりやや長く後出的な見解も出されている。

低い尾根の先端部に築造された高遠山古墳は、現在、西側部分が採石のため大きく掘削され、昭和63年4月25日には、現地で保存問題について協議が行われている。この古墳は、前方後方墳と後円墳の両要素のみられる古墳で、蟹沢古墳より前方部が整っているが、基本的には大きな差違は見出せない。従って内部主体の判明しない現在、展望のきく高所に立地する蟹沢古墳の成立が一応先行するのではないかとみている。この古墳の上部尾根上に三基の古墳がみられ、そのうち桜沢4号墳（径20m、高さ3m）を中部電力の鉄塔建設のため、発掘調査を実施されたが、内部主体は破壊されて小板石小口積の小石室の一部分が残されていたのみであった。後続とした高遠山古墳とは、存立の基盤が共同体の首長とした場合、異なっており、今後の調査によって逆転の可能性も考えられるが、両古墳の築造年代は、四世紀直前から五世紀までの年代と推定したいのである。

この様に、この地方の古式古墳が、この中野平の東南部にみられることは、古代の開発状況や政治

中野平の主な古墳

- 1 七瀬双子塚古墳
- 3 " 3号 "
- 5 " 5号 "
- 6 田麦林畔1号"
- 7 " " 2号"
- 8 厚貝山ノ神 "
- 13 新井大ロフ遺跡
- 14 蟹沢 古墳
- 15 金鎧山 "
- 16 高遠山 "
- 17 姥懐 "
- 18 栗和田1号 "
- 19 紫岩 "
- 20 立ヶ花2・2号古墳
- 21 京塚 古墳
- 22 御獄山 "
- 23 赤岩 "
- 24 八幡塚 "
- 25 小丸山 "
- 26 日向1号 "
- 27 勘介山 "
- 28 五里久保1号 "
- 29 夜間瀬本郷1号 "



史を知る上で参考となる。

これらの中野扇状地の末端部尾根上に位置する古墳に対して扇頂部の、箱山の支脈上の尾根に栗和田1号墳（円墳、径21m、高さ2m）と紫岩古墳（円墳、径19m、高さ2m）が存在する。栗和田1号古墳は、昭和62年秋の開発に伴う事前調査で墳裾の試掘坑より土師片の出土、旧地表面からの河原石の出土、斑点状の混合を示めず盛土層の状態から、古墳との確証が得られた。この古墳から望みられる範囲に、この古墳の被葬者の居住し支配した地域を認めるかによって編年観が違って来る。扇状地上流部の立地を考慮すれば、姥懷山古墳より後出的な要素が強いように思われる。

次は中野市街地より北部の方面を基盤として出現する長丘丘陵の厚貝、田麦、七瀬の古墳群で、この中には、この地方の群集墳の初見とする七瀬古墳群の存在など別の角度から検討を要する古墳も存在する。これらの古墳が築造された時期は、五世紀中半から六世紀までに集中して短期間に特色ある古墳が築造されており、この背景について筆者らも論及したことがある。この時期は、汎日本的に中小古墳の築造が増加する時期でもあり、今回の調査結果をみても画一的な結論は見出せず、この地方の古代の社会構造の究明には、各方面からのアプローチが必要と思われる。

さて、この丘陵は、開発の進展に伴い未調査の古墳は、二基を残すのみとなった。厚貝山ノ神古墳（方墳？、径32m、高さ4m）、林畔二号墳（方墳？、径27m、高さ南より2.5m）は、ほとんど主体部のみの調査だったから、やや問題を残している。林畔1号墳、七瀬双子塚は、学術的には用意が無く発掘されたため、さらに、多くの問題点を残している。今後、再調査の機会に恵まれれば未知見の検出事例が多いと想定されている。

これらの古墳の年代別配列は、七瀬双子塚、山ノ神古墳、七瀬三号墳、林畔二号墳、前山古墳、林畔一号墳、七瀬五号墳、と考えられ六世紀までには築造が終了していたと考えられるが、今後の再調査によっては、入替も考慮され、これらは、墓壇のあり方、副葬品のうち、馬具の形式、供献土器のうち初期須恵器の年代など総合した編年観から、慎重に決定されたいと思われる。このうち七瀬双子塚は、中野平は勿論、下水内郡豊田方面までも眺望できる、この丘陵の最高所（453.7m）中野扇状地との比高差100mの好位置に築造されているので、同族集団を多数かかえた、この地域の首長墓と考えられ、出身の差など被葬者の生前の位置が古墳造営地の優越に反映していると、みられる。これらは、項目を更めて考えてみたいと思う。

これに後続する、この地域の首長クラスの墓は、また東南部に移動して、金鎧山古墳（円墳、東西17m、高さ西より1.9m）となる。南西の墳裾から発見された陶器産の初期須恵器の年代から、従来からの編年観を削ぎさせる要素をもっている。これは畿内地方から移住した権力者の伝世品と解釈すれば、六世紀初め頃の築造と考えたい。

この次に編年したい古墳は、前にもふれた紫岩古墳で、夜間瀬川に面した尾根上に立地し陶器Ⅰ型式に入る須恵器を伴出している。これが地方窯の生産であっても六世紀前半までに築造されたことは確実で、同じ古墳群に包括される山ノ内町本郷の夜間瀬古墳群の前段階の統率者の墓とみられ、安山岩の露出する岩山を切断して墳丘を築造しており、この点は積石塚と変りない。

中野扇状地には、後期に属する石室墳は、現在のところ発見がなく、高杜山麓や山ノ内町方面に類例がみられ、群集してみられるのは夜間瀬本郷地区で、夜間瀬1号墳（円墳、径南北26m、高さ6m、石室全長10m、羨道幅1.2m、玄室奥行4.8m、幅2.7m）は、大きな自然石を使用して石棺を築いている。これらは、後期古墳築造期の最盛期、六世紀後半の年代を与えられており、今後この大規模

な土木工事に従事した築造技術者の系譜などの究明が必要と思われるが、中野扇状地に比べて、やや寒冷と思われるこの地に、この時期の古墳がなぜ築かれたのかの要因は、馬匹の飼育にあったのではと考えている。林畔1号墳、金鎧山古墳などにみられた馬具の副葬から、早くからこの地方の馬の飼育が考慮され、後の鎌倉時代にみられる中野御牧、笠原牧などの牧場経営の始源が、この期に初まっておりますこれらの風習に馴染んだこの地方での新興勢力によって、この古墳群が築造されたと考えたい。夜間瀬一号墳は、早くから開口されて副葬品は知られていないが、須坂市日滝本郷大塚古墳は、昭和56年の、広域農道開設に伴う調査で、破壊された石室内から珠文鏡1面、刀15振、轡の部分7セット、耳飾り、須恵器坏など豊富な副葬品が検出され、この坏蓋の宝珠鈕の形態から、七世紀後半頃の終末期古墳であるとされている。⁽⁵⁾

この様に、両者には編年上の差異が認められるが、地字名が本郷と呼称され当時の郡司層クラスの居住地の可能性があり、高井地方の古墳も、このような一部の支配者クラスの墓を除いて、小規模な石室（槨）墳に変化し、古墳が消滅するのは、大化の薄葬令はともかくとして律令体制の強化によって益々この地域の政治支配が、中央集権化し貢租や防人の徴発など支配体制の強化が、在地の勢力の大規模な古墳の造営を困難にした背景と思われる。

引用文献

- 注1. 松沢芳宏 「飯山・中野地方の前期古墳文化と提起する諸問題」『信濃』35, 3
2. 西方墳裾より出土した初期須恵器によって、五世紀第四4半期の可能性もある。
3. 拙稿 「姥懐古墳出土遺物について」『高井』61号 1982
4. 田川幸生・松沢芳宏 「蟹沢古墳・高遠山古墳・姥懐古墳」 長野県史考古資料編主要遺跡 北東信 1982
5. 須坂市教委地『シンポジウム須坂の古墳文化を語る』 1987

2 中野平の陪塚にみられる古墳と七瀬双子塚古墳

中野平周辺で、主墳と陪墳の関係にあると推測される古墳は、次の三例がみられる。

(1)中野市草間、**京塚古墳**（円墳、径30m、高さ 2.2m）と、この北東約40mに位置する**西山古墳**（径11m、高さ1.3 m）で、ここより昭和24年、長さ86cmの直刀が出土している。七瀬5号古墳第2主体部出土と、林畔2号墳出土の直刀と類似点の多いもので、この古墳の築造年代を示唆している。五世紀後半から六世紀までに延徳低湿地西縁から、小布施北部方面を基盤として成立した古墳とみられるが、主体部の内容が判明しない現在、具体的な被葬者像は不明である。

(2)中野市新野 **金鎧山古墳**（円墳、径21m、高さ 2.6m）この古墳に至る尾根上に、下から、**新野1号古墳**（円墳、径16m、高さ 2.5m）中段に**新野2号古墳**（円墳、径13m、高さ 2.5m）が存在し、主墳の立地条件が限定されている処から、この様な位置に構築されたと思われ大正14年に道路を開削せんとして新野2号古墳が発掘され、小石室内より、剣身2、鉄鏃残片1、土師器破損が発見され、同1号墳からは、土師器片を検出したのみとされている。⁽¹⁾ この様に位置と副葬品の較差から主墳と陪墳の関係にあると思われるが、これ以上、従者が同族関係かの被葬者の実像にせまることは困難である。